

「ウシノシタ類種苗生産技術開発」進展中！

ウシノシタ類は地方名「ゲタ」と呼ばれる大衆魚で、小型底びき網漁業の対象種として重要であるが、近年、漁獲量は減少傾向にある。そこで、資源増殖室では、将来的な種苗放流による資源量の維持を視野に、平成23年度から種苗生産技術開発に取り組んでいるが、2年目の今年、着実な成果がみられている。

今回対象としたのは、ウシノシタ類のうち40cm以上に大型化するコウライアカシタビラメ（マゲタ）とイヌノシタ（アカゲタ）の2種。春産卵のコウライアカシタビラメは、約100尾の天然魚を飼い慣らし、5～6月に水槽内で自然産卵させた。この期間ほぼ毎日産卵し、量産に十分な受精卵が確保できたことから、昨年からの小型水槽での飼育試験で得たノウハウに基づき、40kLの大型水槽での量産試験を実施した。

★コウライアカシタビラメ



①産卵行動（大きい魚が雌）



②受精卵（1mm）



③仔魚（6mm）



④仔魚（8mm）



⑤着底前の仔魚
（10mm）



⑥稚魚（20mm）

その結果、45日間の飼育で全長22mmの着底稚魚7.7万尾の生産に成功し、県東部海域に放流した。まだまだ生残率は10%前後と低いが、ほぼ量産の見通しが得られ、放流サイズである40mmまでの育成試験にまで進展している。

一方、夏産卵のイヌノシタは鱗が剥がれやすく、漁獲のダメージと高水温で天然親魚が死亡しやすいため、これまで種苗生産の報告例が皆無であった。今年はこの難問を解決するため、傷のない小型定置網の親魚を集め、活魚の養生に有効な低塩分の冷却海水で延命に努めた。こうして生残した数尾の雌に成熟ホルモンを注射し、人工授精で数千尾のふ化仔魚を得た。ふ化後2日目から生物餌料のワムシを摂餌し始め、現在約15mmにまで成長している。夏の高水温下で成育するイヌノシタは、コウライアカシタビラメと同様の飼育条件では、ほぼ倍のスピードで成長することが分かった。当初より生残数は減少したが、初の着底稚魚の飼育例として期待は高まっている。（資源増殖室：草加）

★イヌノシタ



①親魚からの卵の搾出



②媒精



③受精卵（0.8mm）



④ふ化仔魚（3mm）



⑤ふ化後1日目の仔魚（4mm）